

---

## 2年4組物語

AQUA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2年4組物語

### 【Nコード】

N46240

### 【作者名】

AQUA

### 【あらすじ】

いつかどこかの中学校の2年4組を舞台にした、ホームドラマ風学園コメディです。

## 登場人物紹介

『2年4組物語』に登場する人物たちの紹介です。  
姓名の表記をしていない人物（父さん、母さん、店員のお姉さん、  
など）については、特に記載しません。

山科 尚美《やましな ひさみ》  
女子。

本編の語り手の一人。ひよつとしたらメインキャストかも？

池内 夕菜《いけうち ゆうな》  
女子。

尚美の隣の席。隣の席なので、尚美ともそこそこ仲が良い様子。

春日 美沙《かすが みさ》  
女子。

尚美の同級生。衝動からあることをしようとしたけれど、ある偶然で思いとどまる。

## その1（前書き）

いきおいで投稿しました。後悔はしてません。

## その1

「・・・はぁ・・・」

思わず漏らした大きなため息を聞きつけたのか、隣の席の池内さんいけうちが眉をひそめた。

「おい。ため息ついてるぞー」

そう言われてもねえ・・・。

「んー。そうかも」

言いつつ、またも大きなため息がひとつ。

これという理由があるわけでも無いのだけれど、この季節はなんだか気分的に気だるいのだ。

「またぁ・・・」

笑いながら、教科書で隠しつつ伸ばした指で、あたしのおでこをこつんとつつく。

「ため息つくと、幸せが逃げるんだぞぉ？ 知ってるう？」

何気ない言葉に、またしても大きなため息。

「ほおらほら。また、ため息。さっきから三回目だよ？」

とうとう苦笑いになってしまった池内さんに、こちらもついつい苦笑いがこぼれる。

「だってさぁ・・・」

「うん？」

「幸せ逃がしてるよー、なんて言われたら、余計ため息つきなくなるって。ふっー」

苦笑い一転、表情が凍りつく。

コミックなら、顔に縦線、冷や汗タラーリって感じ。

「そ、そういえば、そうかも・・・」

「でしょ？」

それが妙におかしくて、思わず吹き出すあたし。つられて吹き出す池内さん。

「そうだよー。ため息の後押しだよー。これってば」

「うんうん。そうそう」

「だめじゃんね？ あたしってば」

「そだよー。だめだよー」

なんてことない事がおかしくて、一緒になって笑い転げるうち。

私のため息は、いつの間にかおさまっていた。

そして。

「そこっ！ 授業中に、なあにを笑い転げとるかっ！？」

罰として、あたしと池内さんが教官室の掃除をやらされたのは言うまでも無い……。

## その2

「ねえねえ、お父さんは何で今の仕事してるの？」

そんな事を尋ねようと思いついたのは、なぜだったのだろうか？  
今になってもさっぱり分からない。

あれは、小学5年生の頃だった。

作文の宿題で、「お父さん」というのはなはだ曖昧なテーマを提示されたのだ。

何をどう書けばいいのかさっぱり思いつかず、夕飯を食べながらTVを見つつ。

ふと、口をついたのだ。

「ええ？何でって言われてもなあ・・・」

困ったような顔が、今でも印象に残っている。

「うーん。そうだなあ・・・。これしか、出来る事が無いからかな？」

曖昧に笑いつつ、お箸を持ったままの右手で情け無さそうに頭を掻いた。

二十八の時にそれまで勤めていた商社を辞め、全く畑違いの建築士に転職したという話は聞いた事があったけれど、その理由などはその時まで聞くことも思わなかった。

小学生だったあたしは、そんな事にぜんぜん興味が無かったのだ。それまでは。

「お父さんは、あたしが生まれた頃に、お仕事を変わったんだよね？ どうして？」

今思えば、しつこい質問だっただろうと思う。

だけど、小学生真っ盛りのお子様には、一旦湧いた好奇心を抑える事など出来ようはずが無いのだ。

それまで苦笑まじりだった父の表情が、ふと真剣味を帯びた。

「うーん。尚美<sup>ひなみ</sup>にはまだ分からないと思うんだけどね」  
箸を置き、そう前置きする。

「それまでのお仕事も、面白くなかったわけじゃないんだよ？ だけれどね、何て言えばいいのかな。何かが違うってずーっと思ってたんだよ。お父さんが本当にしたい事が出来てるのかな？ ってね」  
いつの間にか、お母さんがＴＶを消しているのに、あたしは気がつかなかった。

「そして、考えたんだよ。お父さんが本当にしたい事って何なんだろう？ って。やりたいと思ってることって何なんだろう？ って」

「じゃあ、今のお仕事が、お父さんのやりたかった事なの？」

単刀直入、単純解を求める私に、やっぱり曖昧な笑みを浮かべる父。  
「うーん。正直なところ、まだよく分からないかな？ ……でもね。あの時お仕事を変わらなければ良かった、と思った事だけは一度も無いよ」

話終わって、にっこりと微笑む父。

そして、その肩をぽんと叩いて、ビールのお代わりを注ぐ母。

その顔もやっぱり、微笑んでいた。

なんだったのだろう。

結局、答えになっているのかなってないのか、曖昧な言葉しか聞いていないのに。

私は、幼心にすごく納得してしまったのだ。

お父さんが、何故今の仕事をしているのかという理由を。

あれから、もう何年も経つ。

お父さんは、相変わらず建築士をやっている。

お母さんは、相変わらずお父さんの晩酌に付き合っている。

そしてあたしは、そんな両親がずっと大好きなのだ。

おっと、忘れていた。

結局その時の作文は、テーマが曖昧すぎてほとんどの生徒が提出できず、無かったことにされてしまい・・・。

ちゃんと提出した数人―（あたしも含む）が、とても悲しい思いをして、幕を閉じたのである・・・。

### その3

心臓の鼓動が、はつきりと聞こえていた。

まるで、すぐ近くでお寺の鐘が鳴らされているみたいに。

どきん、どきん

規則正しく、だけどすごいスピードで。

何気なく、努めてさりげなく。

これと見定めたハンドタオルに手を伸ばす。

指先が震えているのが、はつきりと分かった。

息を吸う音、吐く音、耳にうるさいくらい。

そっと掴む。

陳列用のフックから外そうとして、何かに引っかかっているかのよう  
うに、なかなか外れない。

カチャカチャ

焦れば焦るほどフックが絡んでくるようだった。

すぐく長い時間のようで、実際は多分数秒だったと思う。

ようやく外れたそれを、ほんの少しだけ見つめた。

周囲をそっと窺ってみる。

右も左も、ちよつと離れた監視用のミラーにも、他の人影は見えない。  
い。

ごくつ。

唾を飲み込む。

あとは、脇に抱えたトートバックにそつと落とし込めばいい。

何気なく、さりげなく。

ゆつくりを手を下ろそうとして。

「わっ！」

声と同時に肩を叩かれた。

その瞬間の私の悲鳴は、おそらくその店が開店してからこつち、店

員の誰も聞いたことの無いくらい大きなものだっただろうと思う。  
だって、肩を叩いた山科<sup>やましな</sup>さんが、驚いて胸を押さえるくらいだったのだから。

「あー、驚いた。まったく、脅かした私がびっくりしてちゃ世話無いね」

驚きをおさめてから、屈託無い笑顔を見せる。

「あ、それ可愛いね」

私が手にしたハンドタオルを覗き込みながら、軽い口調で言う。

「え？・・・あ、う、うん。そう。可愛いでしょ？」

誤魔化そう。そう思った。

二人の間、胸の高さまで持ち上げる。

その柄に照明が当たるように。血の気が引いているはずの私の顔を、見つめられないように。

「へえ、525円かあ。安いね。私も買おっかな？」

何気ない一言。

しかし、それは私の心に突き刺さった。

そう。たった525円。その品物を、お金を払わずに手に入れようとした私。

そして。

その時になってやっと気がついた。

彼女が知っている事に。知っていて、知らないふりをしてくれている事に。

何も持っていない方の手を、きゅっと握った。

心のどこかを、きゅっと握りしめた。

「んー。・・・あつ。これにしよう。・・・ほら、可愛いでしょう？」

陳列フックから、私の手にしているのとは違う柄のハンドタオルを外して、私に見せてくれる。

「うん、それも可愛いね」

つられて笑顔になれたけれど、でも私の心は。

二人一緒にレジに並んでハンドタオルを買って。  
二人一緒にお店を出て。  
二人一緒に商店街の中を歩いて。  
駅の構内、二人一緒にお手洗いに入るまでが私の限界だった。

「・・・ありがとう」

言葉にすると、涙が出てくるのが一緒だった。

「ありがとう。山科さん、ありがとう」

それだけしか言葉に出来なかった。涙が口に入って、しょっぱかった。

すぐりつくようにして泣きじゃくるクラスメイトを、彼女はこう思っているのだろうか。

軽蔑しているのだろうか、呆れているのだろうか。

そんな事を思ったら、尚更、涙が止まらなかった。

「ど、どしたの？ 大丈夫？」

泡を食ったように言うクラスメイトを、私はぎゅっと抱きしめた。  
決して離したくなかった。

この温かみを、決して手放したくなかった。

「まったく。春日<sup>かすが</sup>さんったら、一体どうしたんだろ？」

クラスメイトを改札に見送って、あたしは腕組みして首を傾げた。

一緒に買い物をした時は、ほんのちよつと顔がこわばっていたような気はするけど、普通だったと思う。

商店街を歩いている間も、いつもより口数が少ないような気はしたけど、やっぱり普通だったと思う。

それが、お手洗いに入った途端、堰を切ったように泣き崩れた。

何度も「ありがとう」と言っていたけれど、何がなんだかさっぱりわからない。

「同じ銘柄のハンドタオルを買った事に感謝……なわけないよね？」

頭の上にはてなマークを浮かべながら、ふと発車案内の掲示板を見上げて。

「やばっ！あと1分っ！」

改札を走り抜けて、目的の車両に駆け込んで。

ふと、思った。

春日さんとは、もっともっと仲良くなれそうだな。って。

### その3（後書き）

続きを書くのはいつのことやら？

## その4（前編）

「ほらあ。早く席につけえ」

乱暴なのか適当なのかいまいちわからない刑部先生おさかへ「（あたしたちの担任）の声が教室に響く。

バタバタと自分の席に戻っていく級友たちを眺めていたら、池内いけうちさんがシャーペンの先で突付いてきた。

「ねえねえ」

ぎりぎりあたしに聞こえるか聞こえないか。

こういう微妙な声の出し方って難しいのに、彼女はいつもいとも簡単にやってのける。けっこうスゴいと思う。

「どしたの？」

あたしもやってみたけど、ただの擦れ声にしか聞こえないんじゃないかな？ これは。

だけど、池内さんは気にしてないみたいだった。

「あのさあ」

「うん？」

「今日の『LHR』ロングホームルーム、クラス役員決めるんだつたよね？」

「そーだったね」

などと軽く返してみたけど、実はあたしは結構緊張してたりしてる。自分が選ばれるなんてことは無いと思ってるけど、誰かが推薦された後の『投票』が嫌いだった。

「。。。さんが良いと思う人、挙手をお願いします」とかって言われても、はつきり言って困る。

なんだかその人に押し付けてるような気分になってしまっし、かといつて立候補するのも嫌だし。

わがままと言う無かれ。乙女心は微妙なのだ。

「山科やましなさんは、誰がいいと思う？」

「んー。あたしじゃ無ければ誰でもいいかな？」

「うわっ。ヒドっ」

ヒドいと言いつつ、池内さんの顔は笑っている。

「じゃあ、池内さんは？」

「んー。あたしも、あたしじゃ無ければ誰でもいいかも？」

「あたしと一緒にじゃん」

「えへへっ。実はそーなのよね」

二人してぐすくすと笑っている間に、どうやら担任からの連絡事項は終わってしまったらしい。

男子出席番号1番の安藤くんと、女子出席番号1番の足立さんが教室のところに立っている。

「始まるね」

「そだね」

お喋りを止めて、前を向くことにした。

「立候補したい人はいませんか？」

安藤くんの声が静まり返った教室に木霊するけれど、手を上げる人は誰も居なくて。

思っていた通り推薦になってしまった。

クラス役員は、男子・女子の委員長が1名ずつと男子・女子の書記が1名ずつの全部で4名。

このクラスは男子17名と女子16名だから、だいたい8人に1人が選ばれる計算なんだけど。

気が重いなあ・・・。

つきそうになるため息をどうにか飲み込んだ。

そんな事をしている内に、いつの間にか何人かの名前が黒板に並んでいるようだった。

どれどれ？

拳がっている名前を読んでいると、後ろの席から「しょーもね・・・」という呆れ声が流れてきた。

「坂元、どしたよ？」

この声は誰だっけ。坂元くんの隣の赤坂くん？

「どーもこーもねえだろ・・・」

ボソボソと交わされる囁きをこっそり聞いていると「しょーもない」理由がよく分かった。

付き合ってる2人が揃って他薦されてたり、仲の良い男子同士女子同士が互いに他薦し合ってた。逆パターンで、仲の悪い人に推薦されて推薦し返してたり。

要は推薦合戦。んで、男女足したら偶数になるらしい。

それはそれでいーんじゃないかと思わないでも無いんだけど、やっぱりダメなのかな？

っていうか、坂元くんはどうしてこんなに詳しいんだろ？ ひょっとして事情通ってやつかな。

そういう事に詳しい人もいるって分かってはいたけど・・・。

っていうか実際、池内さんも結構その辺詳しくかったりしてるし、疎いあたしが少数派？

だけど誰と誰がどうこうだとか、そういうの勘繰るのは好きじゃないし。

あ、でも、仲の良い子が誰が好きで誰が苦手だとかいうのは、知っておいた方がいいのかもしれない。

遊んだりするときに一緒に声掛けちゃって気まずいとか嫌だし。

結局あたしはどうなんだろう。知りたいのか知りたくないのか。そここのところどうなんだろう？

脇道に浸っていたら、急に周りがやけに静かになった。

目を上げてみると教壇の前に刑部先生が仁王立ちしている。

「お前たち、真面目に考えてるか？」

その声はすごく硬かった。

「仲の良い者同士でやるなどは言わない。その方が効率とか能率とかが良い事もあるしな。」

でもな。

お前たち、自分で名前を挙げた相手の言う事、決めた事、ちゃん

と守れるか？

勘違いしているやつもいるようだが、クラス委員はクラスのお世話係じゃないんだぞ？

クラスの代表であり、リーダーでもあるんだ。場合によっては、独断でクラス全体に関係していく事を決める事だつてある。

そんな時、ちゃんと指示を守れるか？

そういう事をちゃんと考えて推薦してるか？

たかがクラス、されどクラスだ。もう少し真剣に取り組んで欲しいと、先生は思う」

一息に言い終えて教室をぐるりを見回すと、先生は自分の席に戻っていった。

## その4（前編）（後書き）

終わってないのにゼンペンとはコレ如何に？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4624o/>

---

2年4組物語

2010年10月29日20時35分発行